

## 『学会見聞記』

第112回日本解剖学会  
全国学術集会に参加して

黒 保 美 穂

(医科学専攻修士課程2年、組織発達構築学分野)

本年3月27日～29日、大阪国際会議場で開催された第112回日本解剖学会全国学術集会に出席して発表した。今回は私のほか、教室の4人の先生や2人の博士課程院生による見聞の内容をまとめて報告したい。会場は大阪中心部の中之島にあり、かつて近くに大阪大学医学部のあったところと聞く。全12階のうち2フロアだけで今回の2000名近い参加者、7つの講演会場と2つのポスター会場を収容できる巨大な国際会議場である。金沢市でも中心部の広大な空地を生かしてこんな施設をつくれぬものかと痛切に感じた。

まず会頭である阪大の遠山正彌教授による講演「統合性失調症の分子機序」は、統合失調症の原因遺伝子として注目されるDISC1およびDysbindinの機能についてであった。まずDISC1遺伝子は統合失調症を多発する家系で転座をおこなっていることから、転座により失われるDISC1蛋白質の部分に結合する3つの蛋白質を同定した。これらの蛋白質とDISC1蛋白質の結合が阻害されることによる神経回路形成の阻害が統合失調症に関与する可能性が示された。つぎにDysbindin蛋白質は統合失調症で発現が低下することで知られるが、SNAPINとの結合を介してドーパミン神経からのドーパミン遊離を抑制することがわかり、統合失調症ではこのシステムの障害によりドーパミン遊離の増加が起きることがわかった。

いくつかの特別講演はすべて神経系に関するものだったが、最新の分子生物学的アプローチによる神経学研究に交じって、神経解剖学の泰斗である濱清博士による、古典的なゴルジ染色で見た脳の星状グリア細胞の3次元形態の研究には、形態学の原点を見る思いがした。次に今回の学会の目玉として、解剖学以外の各分野の著名な研究者(すべて阪大の現役教授)による教育講演がたっぷりと組まれていた。すなわち(敬称略)米田俊之「骨と乳がん」、審良静男「自然免疫による病原体認識機構とシグナル伝達経路」、辻本賀英「細胞死の分子メカニズム」、柳田敏雄「1分子ナノテクノロジーと生命科学の融合」、米田悦啓「核一細胞質間蛋白質輸送と高次生命機能の制御」、谷口直之「糖鎖の機能解明とその医学への応用」、長田重一「アポトーシス細胞の食食とその異常」である。いずれの講演も極めて興味深く啓発的で、学際化した現在の生命科学において解剖学と他の分野との間にほとんど垣根がないことを実感した。

シンポジウムおよび一般演題(オーラルとポスター)の中から私および教室の参加者が興味を持った発表をいくつか挙げる(敬称略)。阪井丘芳「唾液腺分枝の分子機構」：胎生期唾液腺の器官培養でのbranching morphogenesisにおいて、分枝部と非分枝部をそれぞれマイクロダイセクションで採取して遺伝子スクリーニングを行ったところ、フィブロネクチンとE-カドヘリンが逆のパターンで発現していた。脇坂聡他「味蕾細胞の分化

様式：「二細胞説」の提唱」：味蕾の細胞のうち味覚細胞と考えられる明調細胞は求心性シナプスを持つⅢ型と持たないⅡ型からなるとされているが、Ⅲ型がアポトーシスに陥る過程でⅡ型に移行することが組織化学的に示され、両者は同一の細胞であることが示唆された。高野和敬他「アカハライモリ左右半胚における心臓形成および左右対称性：左右の予定心臓中胚葉が有する内在性ループ形成能の解析」：哺乳動物の心臓発生においては、左右の予定心臓中胚葉(PCM)が融合した後に右向きループ化が誘導されて左右非対称性が形成される。これに対して、両生類では融合前に左側のPCMが内在性に右向きループ形成能をもっていることがわかった。寺沢和貴他「ヒト赤血球には内部細胞骨格が見られ、 $\beta$ アクチンとニューロフィラメント蛋白質を含む」：赤血球の形状は膜直下の細胞骨格のみによりつくられると考えられているが、イオンエッチングSEMによる観察で、細胞質全体の細胞骨格が関与することが示唆された。

私自身は、「マウス精巣におけるアクチン結合蛋白質エズリン(Ezrin)の発現と局在」と題するポスター発表を行った。エズリンは細胞膜と細胞質のアクチンとのクロスリンカーとして作用する蛋白質である。精巣の精細管上皮の極性維持にエズリンが関与する可能性を探るため、Westernプロットおよび光顕・電顕の免疫染色によりマウス精巣を調べたところ、エズリンは精子形成末期のstep15-16の伸長精子細胞の細胞質に局在することがわかった。今回は初めての学会発表で緊張したが、学会の雰囲気になれることができた。

総会および懇親会において、解剖学会理事長を退任する東大の広川信隆教授の挨拶があった。近年、全国の医学部教育が即戦力としての医師の養成に偏る傾向にあり、さらに卒後研修必修化により、医学部卒業者が研究の場に進まなくなる結果、医学部が職業専門学校化し、解剖学などの基礎医学が軽視されることを憂いていた。同時に、現在の日本の解剖学会が学問的水準としては世界一であるとも断言していた。

最後に、今回参加した印象として、解剖学会は日本の医学系学会で最も古い歴史を持つが、現在のそれは肉眼解剖学や解剖学教育から、組織細胞学、神経科学、発生学、細胞生物学、分子生物学まで、非常に多様な分野を扱い、しかも活発であるということである。バイオテクノロジーを駆使する点では学際的になったとはいえ、形態へのこだわりおよび医学部教育への関与という点において、結束がよく保たれている学会であると思った。

